

日蓮大聖人のご生誕日に思う - 近刊「法華経入門」の不正 2026年2月16日
池田先生が「法華経の智慧」でご指導された日蓮仏法の真義を無視する不知恩の書

創価高・大学4期 図齊 修

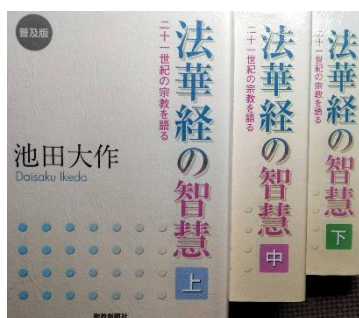
(以下、赤青茶字、下線は図齊記す)

本日、日蓮大聖人のご生誕日、御本尊に心より報恩感謝申し上げます。私は先週11日、戸田先生のご生誕日に2つの拙文を記し皆様に配信致しました。

<https://share.google/WpvepijhfviPmgI6p> <https://share.google/OfGtLZVDIWHxIMD2U>



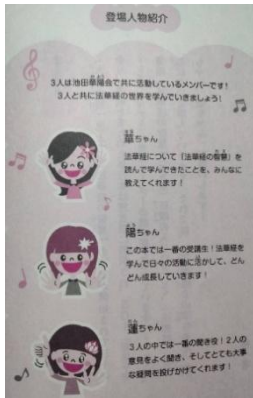
その後、1月26日発刊「対話で学ぶ 法華経入門 創価学会女性部編」(以下「入門」と略)を読みました。結果、私は愕然、啞然としました。これは池田先生が「法華経の智慧」で垂教された日蓮仏法の真義を記さず、池田先生のご指導に完全に違背している！からでした。



先生が万代の世界広宣流布のために残された玉稿「法華経の智慧」普及版上 55.56 頁には一法華経の真髓を説かれたのが大聖人です。法華経を学ぶことは、大聖人の仏法を学ぶことに通ずる。大聖人の仏法を学ばば、法華経も分かっていく。表裏一体です。ゆえに法華経を語ることは、ただ釈迦仏法のみを探究することではない。大聖人の仏法の、はるかな未来を見つめての壮大な挑戦なのです。一と。

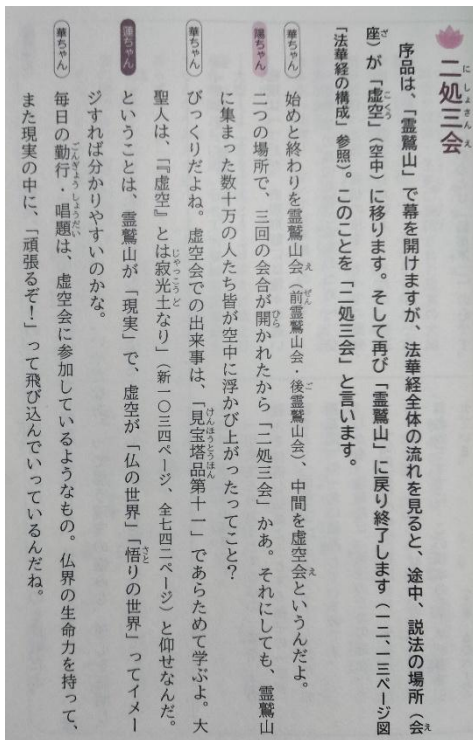
しかし、「入門」は終始一貫して、法華経文上の釈迦仏法の解説だけです！

この現実を日蓮大聖人と池田先生はどれほどご立腹か、私は心痛の極みです。ゆえに私は、日蓮大聖人の弟子、また、池田門下生の責務、使命として、この拙文で「法華経の智慧」原本(以下「原本」と略)と「入門」の内容がどれほど乖離しているかを客観的に引用して比較しました。その結論は一「入門」が「原本」を引用して語る以上は、池田先生が教示された日蓮本仏論の真義、就中、**日蓮大聖人は久遠元初自受用身**であられ、大聖人が顕された曼荼羅本尊は、まさしく大聖人様そのもの、即ち、**人法一箇の御本尊**であることを無視してはならない。しかし「入門」がその真義を記してないことは、日蓮大聖人と池田先生への完全な背信であり、不知恩の極みである！一です。 1/21



左：華ちゃん 法華経について「法華経の智慧」を学んできたことを、みんなに教えてくれます！ーとあります。

以下、「入門」の重要なところを引用し、それに対して池田先生の「原本」を引用、どれほど「入門」が浅薄であり、「原本」について語る池田華陽会、華さんの「原本」読書が不完全であり、池田先生の本意を理解していないかを明白にします。「入門」の序品には以下記述です。



「入門」19頁、**序品**には一毎日の勤行・唱題は虚空会に参加しているようなもの。仏界の生命力を持って、また現実の中に、「頑張るぞ！」って飛び込んでいっているんだねーと。

それに対し「原本」上114頁、**序品**で一池田 じつは、大聖人の仏法と釈尊の仏法の特質の違いを、この「二処三会」の構造を借りて説明することができる。

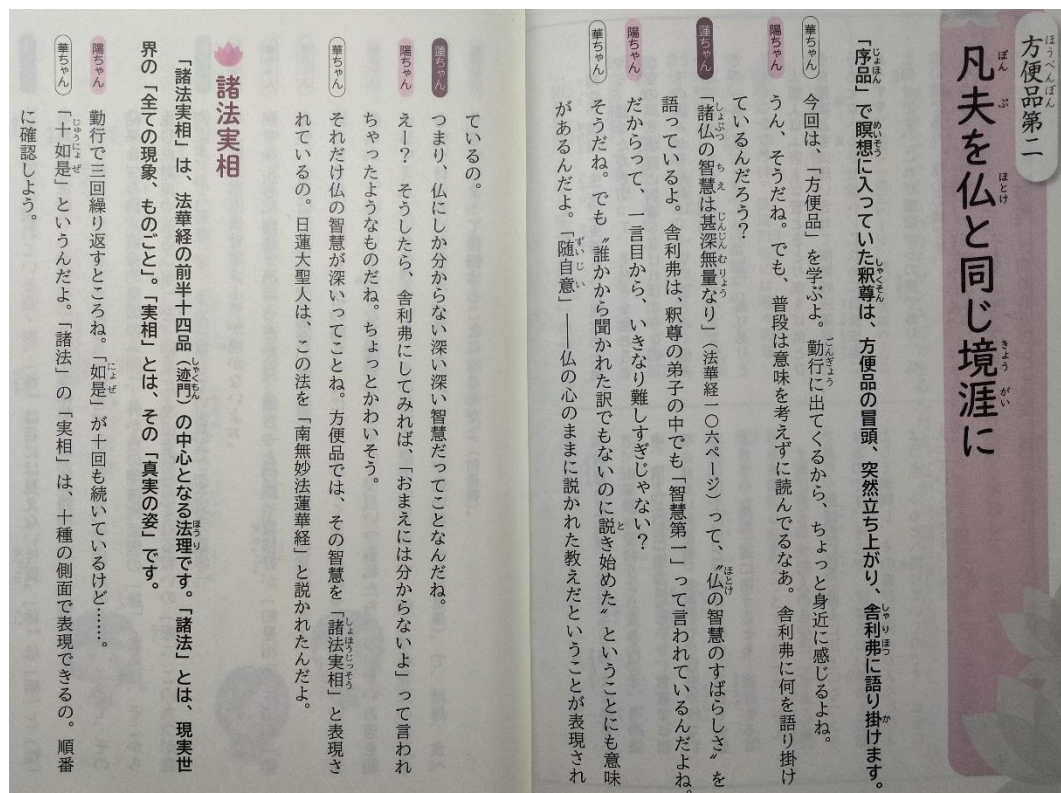
須田 どういうことでしょうか。

池田 釈尊の仏法は、どちらかといえば、**靈鷲山から虚空会へ、すなわち現実生活から仏の智慧の世界を求めていく仏法です。虚空会で説かれる寿量品（第十六章）の文底に秘し沈められた「南無妙法蓮華経」が目標であり、ここに到達しようとする仏法**

です。これに対し、**寿量文底から靈鷲山へ、すなわち「南無妙法蓮華経」から現実生活へと向かう方向が強く出てくるのが大聖人の仏法です。また、上123頁には、**一日蓮大聖人は虚空会の儀式を借りて、御自身の内証の悟りを御本尊に示してくださった。この御本尊を信受している私どもこそ、法華経のダイナミズムを、そのまま生活に反映させているのです****ーと。

(私見) 池田先生は序品において、結論の**一寿量品の文底に秘し沈められた「南無妙法蓮華経」、また、日蓮大聖人御自身の内証の悟りの御本尊**一を明確にご指導なのです。しかし「入門」は、この日蓮仏法の真髓について何も記さない。これは、冒頭から「原本」の真義、池田先生のご指導を無視していると言わざるを得ない！

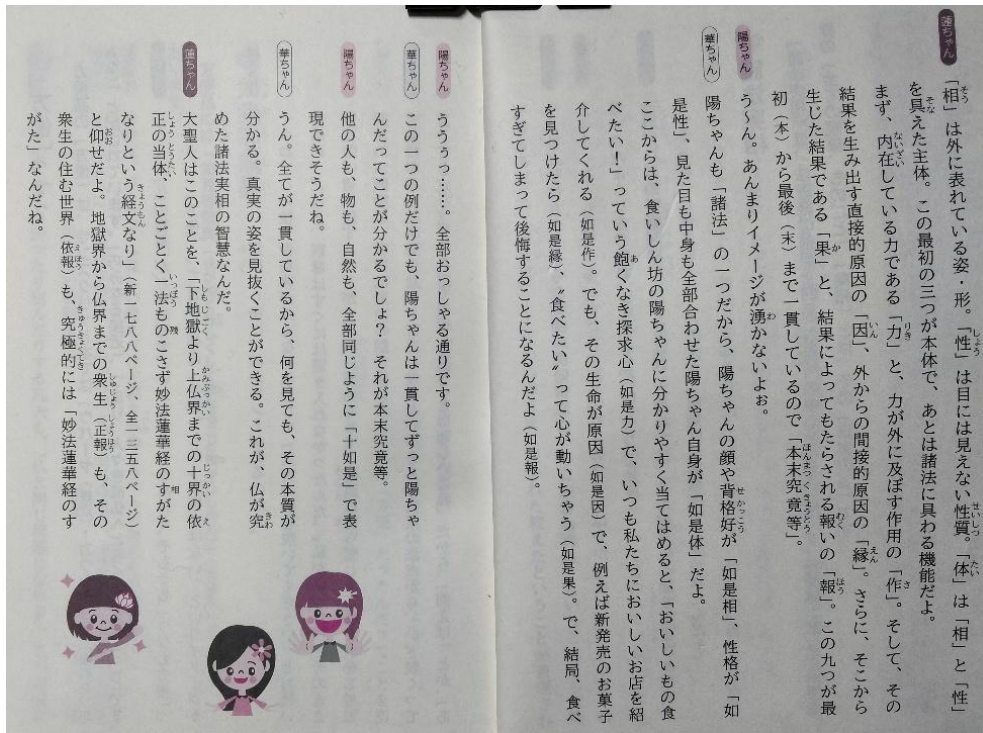
次に、「入門」22, 23頁、**方便品第二**には以下記述です。一



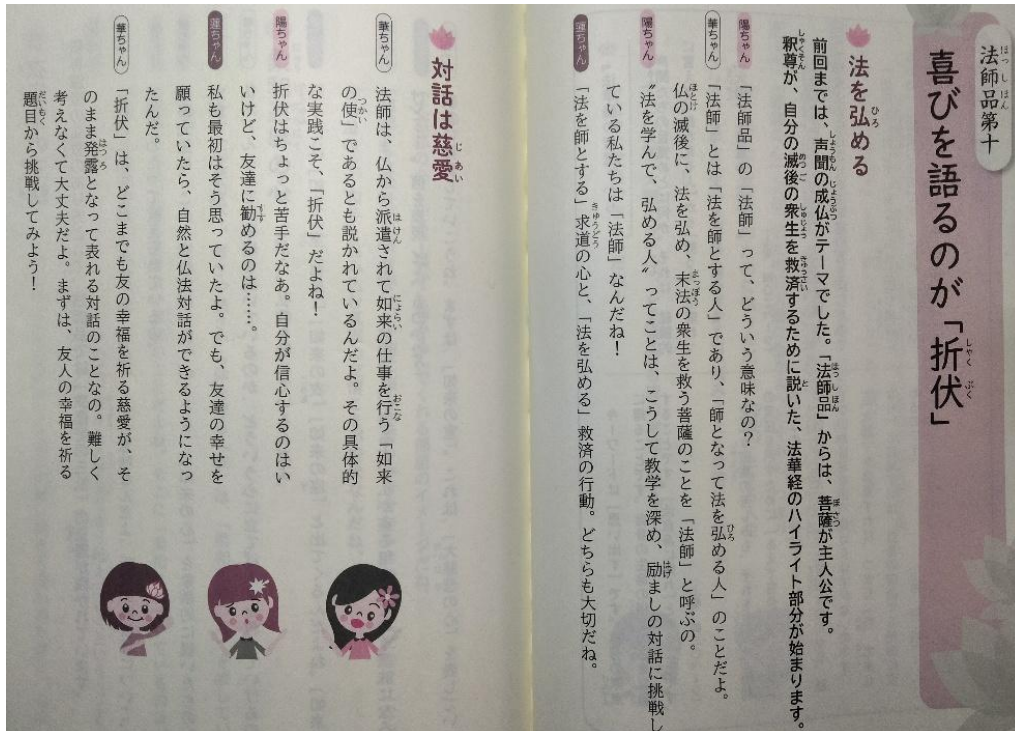
上記に対し「**原本**」上199頁、**方便品**で**池田先生**は「**一念三千の法門を振り**
漉ぎたてたるは大曼荼羅なり」と。一念三千の「**一念**」は**実相**、「**三千**」は**諸法**
です。**御本尊は、諸法実相の御本尊であり一切衆生の諸法実相を映す”鏡”**です。
中央の「南無妙法蓮華経 日蓮」は実相を表し、左右の十界は諸法を代表してい
ます。この**諸法実相の御本尊**に向かって唱える妙法の音声は、我が身の**仏性**を
呼びます。呼ばれた**仏性**は外に顕れようとします。すると、**自覚**するとしないと
にかかわらず、胸中に「**仏界の十如是**」の**太陽**が昇る。本有の**青空**が、**厳然**と我
が胸に広がるのです。御本尊を信じ、「**南無妙法蓮華経**」と唱えることによって、
自身（諸法）が妙法の当体（実相）と輝くのです。まさに万人に開かれた「**一生**
成仏」の修行法です。外にある御本尊も「**妙法蓮華経**」。内なる我が一心も「**妙**
法蓮華経」。御本尊を”**信ずる**”ことが、同時に、我が身の**諸法実相**を**悟る”智**
慧”になっている。「**以信代慧（信を以て智慧に代える）**」の法門です」と。

（私見）「入門」の諸法実相の解説には、上記の続き24、25頁（次頁に掲示）
も含め、「**原本**」方便品での先生のご指導**御本尊は、諸法実相の御本尊であり**
一切衆生の諸法実相を映す”鏡”です。中央の「**南無妙法蓮華経 日蓮**」は**実相**
を表し、左右の十界は諸法を代表がないのです！「入門」の24頁のお菓子
の話も楽しいですが、これでは**画竜点睛**を欠いた**方便品**であり、池田先生のご指
導を理解しない、拝していない！と言わざるを得ません。 3/21

続く24, 25頁は諸法実相についての解説、これでは浅薄すぎる！



続いて、「入門」78, 79頁、法師品第十には以下の記述です。



上記「入門」の記述—「法師」とは「法を師とする人」であり、「師となつて法を弘める人」のことだよ。仏の滅後に、法を弘め、末法の衆生を救う菩薩のことを「法師」と呼ぶの一とだけ。

それに対して、「**原本**」上、**法師品** 437 頁には—
遠藤 そこに**法師品**以降が大切であるゆえんがありますね。大聖人は、法師品から安樂行品（第十四章）までの五品は、その前の八品で明かした「一仏乗」の法を、**末法の凡夫**が、どのように修行すべきかを説いていると仰せです。（「**方便品**より**人記品**に至るまで八品は正には二乗作仏を明し傍には菩薩凡夫の作仏を明かす、法師・宝塔・提婆・勸持・安樂の五品は上の八品を末代の凡夫の修行す可き様を説くなり」）

池田「末法の凡夫」とは大聖人のことであられる。総じては、**大聖人に連なる門下のこと**です。大聖人は、御書の随所に、**法師品**など五品の経文を引用されている。**法華経の中でも法師品以降、滅後について説かれた個所の引用は圧倒的に多い。**それは、ここに説かれた滅後の「**法華経の行者**」の姿が、そのまま**日蓮大聖人のお振る舞いと一致しているから**です。

言い換えれば、**法華経を身で読まれたのは大聖人お一人である、法華経は、大聖人のために説かれたのである、という証明になっている。**そして、**仏を仏にした「根源の一法」である「南無妙法蓮華経」こそが法華経の真髓であり、末法のすべての衆生を救う大法であることを教えようとされたのです**—と。

（私見）池田先生が「**原本**」に記された—**法華経は、大聖人のために説かれたのである、という証明になっている**—が、「法華経の智慧」の主題なのです！この重要さを、上記「入門」は全く無視し、ただ一仏の滅後に法を弘め、末法の衆生を救う菩薩の事を「法師」と呼ぶの一と。これでは、池田先生のご指導の真意とはいえない！

* 重要な参考：池田先生の「御義口伝講義」上 584 頁、法師品には—

法師の「法」とは南無妙法蓮華経、「師」とは日蓮大聖人の事であ

り人法一箇を表しているのである—との深義が記されています。

続いて「入門」86, 87, 90 頁、**見宝塔品第十一**には以下記述です。5/21

自身の生命を輝かせる

宝塔の出現

「見宝塔品」は、七宝でできた巨大な宝塔が大地から出現するところから始まります。

突然、大地から出てきた宝塔。その高さは地球の三分の一ほどにもなるといわれているよ。しかも、七宝、つまり金・銀・瑠璃・瑪瑙などの七種類の宝玉で飾られているんだって！

えっ！ものすごい大きさ！ドラマチックな展開だねー！宝塔っていったい何？どうして現れたんだらう？

「見宝塔品」には、「宝塔の由来」が説かれているよ。宝塔は、多宝如来が建立させたもので、「妙法蓮華の法門」が説かれる所にはどこにも出現して、それが真実であることを「証明」するんだって。

ということ、積尊の説法が「正しい」と証明するために宝塔が出現したんだね。それにしても、想像を絶する大きさとくらびやかさだよ。

そうだね。でも実は、宝塔とは「我らが一身」のことである。と日蓮大聖人は仰せなんだよ。つまり、宝塔とは自分自身のことを表しているの。

私たち自身の生命の偉大さを教えられているんだね。私たちは宝塔のように尊い存在なんだ！

虚空会

積尊は、地上から遥か高い宝塔を見上げている人々を空中に引き上げます。

ここから「虚空会の儀式」が始まるよ。大聖人は、虚空会の儀式を御本尊の相貌に顕されたんだ。大聖人以外には「宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし」(新

一七八九ページ、全一三五八ページ)と言われているよ。
私たちが毎日、御本尊の前で修行するのは、宝塔品の儀式に参加していることになるんだね。厳粛な行いなんだね！

上記には一大聖人は、虚空会の儀式を御本尊の相貌に顕わされた一とだけ。それに対して、「**原本**」上 480, 481 頁、**見宝塔品**には一

須田 **釈迦・多宝の二仏は南無妙法蓮華經の一法の「働き」**なのですね。**釈迦・多宝という姿によって、境智不二の南無妙法蓮華經を表している**わけです。

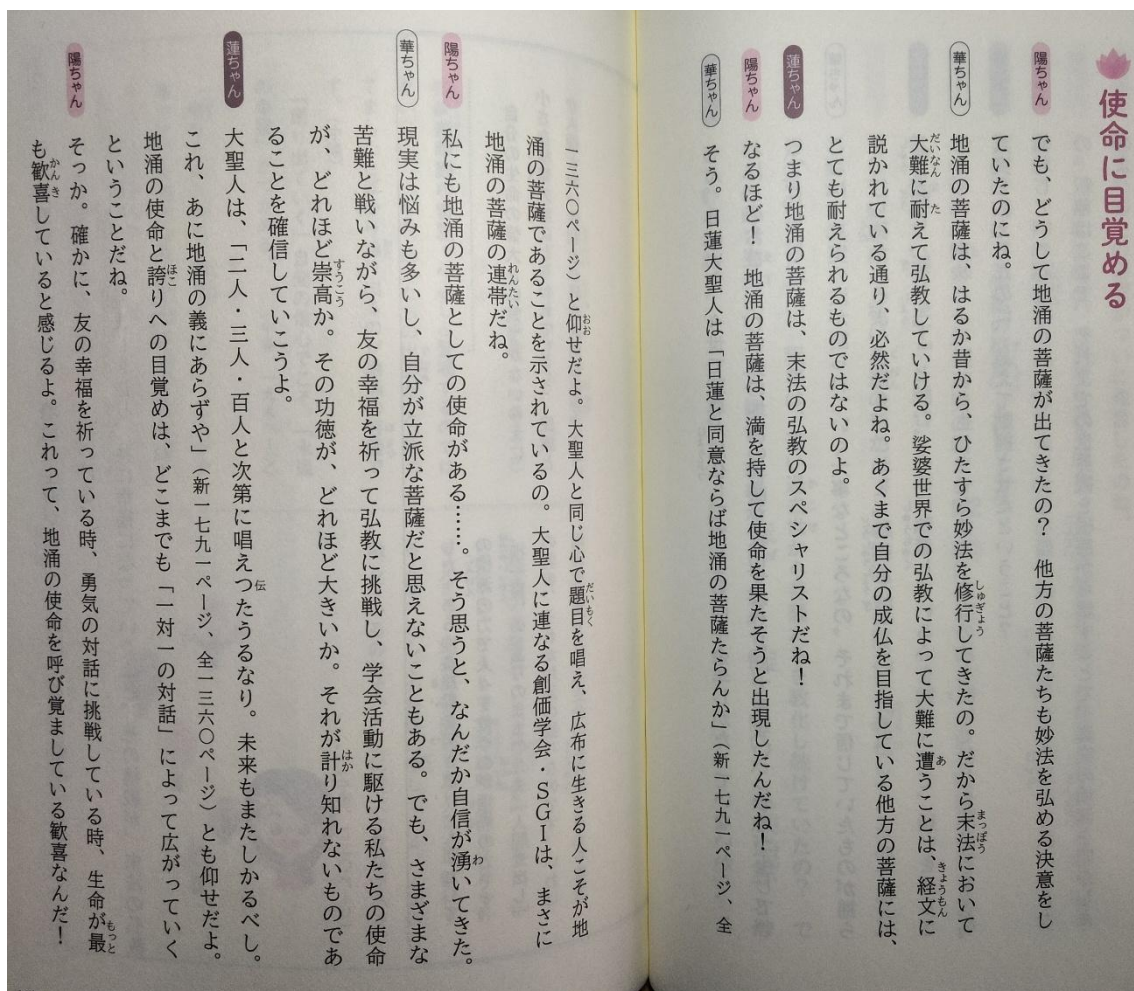
池田 そう。大聖人は「**釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こそ本仏にては御座候へ**」と仰せです。明快だね。

宝塔品の儀式と御本尊

遠藤 大聖人の顕された御本尊の相貌で言えば、中央の首題に南無妙法蓮華經の一法が、その脇士として釈迦・多宝が配されている所以がまさにそこにあると言えます。齊藤 二仏並坐はまた「諸法実相」を表します。多宝が諸法、釈迦が実相です。また「生死不二」を表しています。多宝が死、釈迦が生です。須田 大聖人は、二仏並坐をはじめ宝塔品の儀式をもって御本尊を顕されました。大聖人以外には「**宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし**」と言われていましたし、「**是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中の大牟尼世尊分身の諸仏、摺形木たる本尊なり**」と断言されています。

池田 阿仏房に宝塔品の意義を説明されるに当たって、「**此の法門ゆゆしき大事なり**」と断られているのも、**この法門が御本尊に関わる根本問題だから**でしょう。一と。(私見)まさに、「原本」は池田先生の法華經文底からの御本尊の相貌の講義なのです！それを示さない「入門」は論外なのです！ 6/21

続いて、「入門」122頁、**從地涌出品第十五**には以下の記述です。



「入門」**從地涌出品**の記述118～125頁の全頁で、**日蓮大聖人**は地涌の菩薩との文上解釈だけです。しかし、「**原本**」中の191～193頁には一

「日蓮又日月と蓮華との如くなり」

齊藤 地涌の菩薩も、神力品（第二十一章）では、太陽に譬えられています。（「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅し」〈法華經五七五ページ〉）そうすると、地涌の菩薩もまた、教主・釈尊と等しく蓮華であり、太陽であることになりますね。

池田 そう。この神力品の文について、大聖人はこう仰せです。「上行菩薩・末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明を指し出して無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり」と。末法で法華經の肝要である南無妙法蓮華經を弘通される大聖人こそが、上行菩薩の再誕であることを示されているのです。さらに「一切の物にわたりて名の大切なるなり（中略）日蓮となる事自解仏乗とも云いつべし」と仰せです。

須田 自解仏乗とは、「みずから仏の境地を悟った」ということです。大聖人ご自身が「仏」であり、その悟りを「日蓮」という御名に込めてあるということですね。遠藤 四条金吾夫人へのお手紙でも、「法華経は日月と蓮華となり故に妙法蓮華経と名く、日蓮又日月と蓮華との如くなり」と仰せですね。

池田 「日蓮」という御名を名のられたこと自体が、大聖人こそが、法華

経の御当体であるということ。大聖人こそが末法の全民衆を永遠に照らす”太陽”であり、諸仏を生んだ根源である清浄の”蓮華”——なかなづく白蓮華であることを、示されたものなのです。日蓮という御名については、重々の深義があり、くわしくは、日寛上人が「日蓮の二字の事」(『富要』三巻二五五ページ)にまとめておられる。結論を言えば、お名前自体が、大聖人こそ末法の法華経の行者であり、御本仏であるとの大宣言なのです—と。

(私見) 池田先生は「法華経の智慧」の最初から最後まで、日蓮本仏論をご教示なのです！それは、序品の講義で—

寿量品の文底に秘し沈められた「南無妙法蓮華経」(本拙文2頁掲示)か

らこの從地涌出品第十五においても—大聖人こそが、法華経の御当体で

あり、御本仏である—とご指導なのです。

そして、以下、法華経本門の中心である如来寿量品第十六の—

日蓮大聖人は久遠元初の自受用身如来であられ、日蓮大聖人が顕わされ

た曼荼羅御本尊は、人法一箇の御当体であられる！—との日蓮本仏論の

結論へと論述が進められているのです！ その「原本」の池田先生の真意を弁えない「入門」は、まさに池田先生への違背と言わざるを得ない！ 8/21

続いて「入門」は126~149頁で、如来寿量品第十六について上中下に分けて解説ですが、そこには池田先生が「原本」でご垂教の**一日蓮大聖人は久遠元初自受用身如来**であり、曼荼羅ご本尊は**人法一箇**のご当体である一が記されず、文上で釈尊が永遠の仏としか記さず、最後の142~145頁には以下の記述です。

如来寿量品第十六 下

師と共に同志と共に今日を勝つ!

華ちゃん 「如来寿量品」で、仏の永遠の生命が明かされたことを学んだね。

道云ん うん。釈尊が今世で初めて成仏したという「始成正覚」は方便であって、実ははるか久遠の過去にすでに成仏していたという「久遠実成」、つまり、仏の永遠の生命が明かされたんだよね。

華ちゃん そう! このように「仏の永遠の生命」が明かされたことを「開近顕遠」(近を開いて遠を顕す)と言うの。始成正覚(正)を開いて久遠実成(遠)を顕した、という意味だよ。寿量品には、「私が、もと菩薩の道を実践して成就したところの寿命は、今なお尽きていない。さらに先に述べた五百塵点劫に倍して続くであろう」(法華経四八二ページ、大意)とあるよ。

華ちゃん 仏の、未来永遠に衆生を救い続けるとの宣言だね! 永遠に生命が続く、ってどういうことなんだろう?

道云ん とても不思議な話のように感じるよね。早速一緒に学んでいこう!

永遠の生命

華ちゃん 寿量品を学んで、朝晩の動行が楽しくなってきたよ。さらに挑戦しよう!

華ちゃん 陽ちゃん、えらい! 私たちが朝晩の動行で読誦しているのは、方便品と寿量品の「自我偈」だよな。

道云ん 寿量品の要である「自我偈」の始まりの一字と終わりの一字に注目してみよう! 最初は「自我得仏来、所経諸劫数、無量百千万」(法華経四八九ページ)だから「自」の字で始まっているね。最後はどうかかな?

華ちゃん 「以何令衆生、得入無上道、速成就仏身」(同四九三ページ)だから、最後は「身」の字で終わっている!

華ちゃん 「自」から始まり、「身」で終わる。二つの字を合わせると、「自身」だね。

華ちゃん わあ、本当だ! 合わせると「自身」になる〜! す〜い!

華ちゃん まさに寿量品は、「自身」の永遠の生命を説いているんだよ。「永遠の仏の生命」とは、「自身」の生命の奥底にあるの。生死にとらわれない自由自在の境界に目覚めよという、仏の呼び掛けが込められているのよ。

華ちゃん 仏の生命が「自身」の中にあるということは、以前、十界論で学んだね!

華ちゃん そうだね。自身の中に、仏と同じ生命が眠っているんだよね。

道云ん そう! ということは、私たち自身も仏と同じように、永遠に生死、生死を繰り返しながら、自他共の幸福のために行動し続ける使命があるということになるよね。

華ちゃん そっかあ……! 生死を繰り返すって、何だか不思議だね! 私たち自身が「永遠の仏の生命」を開くには、どうすればいいのかなあ?

華ちゃん 今世を生きている私たちが今、「永遠の生命」を覚知するってどういうことなのか……(ここで、「良医病子の譬え」を復習してみよう。

華ちゃん えーつと。毒薬を飲んで苦しんでいる子どもたちの中で、本心を失い、薬を飲むとしない者がいたのよね。でも、父の死を知った悲しみで、ようやく本心を取り戻し、薬を服して健康になったところ、父が帰ってくるという話だったよね。

道云ん 子どもは「衆生」、父は「永遠の仏」の譬えだよな。仏の死は、衆生に「永遠の仏」を求めさせるための手段だったんだ。

華ちゃん そう。衆生は、仏の死を聞いて嘆き、一心に「永遠の仏」を求めた。「自我偈」に「一心欲見仏、不自惜身命(一心に仏を見たまつらんと欲して、自ら身命を惜しまざれば)」(法華経四九〇ページ)とあるようにね。その「一心」に込めて、「永遠の仏」が姿を現したの。つまり、自身の中に「永遠の生命」を開くために必要なのは、「一心」に求道心を燃やすことなんだ!

華ちゃん その通りだね! 一心に不惜身命で戦う一瞬一瞬の行動に、仏の境界が顕れる。今世の今この瞬間に、広宣流布という大願に生き、自他共の幸福のための実践に励むことが、私たちが「永遠の生命」を開いていくということなの。

上記に対して、「**原本**」中 249、250 頁、**如来寿量品**には以下の記述です。—
遠藤 寿量品のあらましですが、久遠の釈尊の“過去の常住”が説かれたところまで述べてきました。寿量品では次に、仏が“未来においても常住する”ことが明かされていきます。すなわち、「私が、もと菩薩の道を実践して成就した寿命は、今なお尽きていない。さらに五百塵点劫に倍して続くであろう」（法華經四八二ページ、趣意）と述べられます。**齊藤** 未来に向けてのメッセージですね。「衆生を救う」という観点から言えば、過去よりも、むしろ未来の方に寿量品の本意があります。大聖人は、寿量品はもっぱら釈尊滅後の衆生のため、なかならず末法のために説かれたと仰せです。ただ、過去を説いているのは、“成仏の本源に遡る”意味があるのではないのでしょうか。

池田 そうかもしれない。仏の生命の根源の姿を示してこそ、生死に苦しむ未来の人々を救えるからです。その一番の本源を示唆するのが、今の「我本行菩薩道（我もと菩薩の道を行じて）」（法華經四八二ページ）の文だね。

齊藤 久遠における釈尊の成仏には、“成仏した本因”があったということです。ここを深く究めると、大聖人の文底仏法に入ってきます。**須田** **大聖人は「開目抄」で「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」と仰せられています。**では、寿量品のどの文の底なのか——古来、いろいろと論議されてきました。日寛上人は、この「**我本行菩薩道**」の文の底に沈められていると明快に述べられています。

池田 そうだね。「永遠の大生命」を自覚した仏の不可思議な境地を、天台は「一念三千」として表現した。その一念三千も、寿量品を魂とします。ただ、寿量品では釈尊の成仏後（本果）の不可思議な姿をもって永遠の生命を示した。これが「本果妙」です。しかし問題は現実の人間がどうしたら永遠の大生命を自覚できるかです。それを説くのが大聖人の「本因妙」の仏法です—と。

（私見）池田先生は「**原本**」で、—**大聖人は「開目抄」で「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」**をご教示なのに、「入門」は、この開目抄の文すら記していない！これは最大の欠陥である！

また、上記「入門」に対して、「**原本**」中 264,265 頁、**如来寿量品**には—
釈尊の師は南無妙法蓮華經如来

池田 法と人（仏）は本来、不可分なのです。「如来」というのも「如（真如・真実の世界）からやって来たもの」ということです。すなわち「如来」とは、真実の「法」が現実の上に表れたのです。宇宙生命に“人”の側面と“法”の側面があり、それが一体なのです。少しむずかしいかもしれないが、大事なところなので、もう少し言っておこう。釈尊の説法に「法を見る者は我を見る、我を見る者は法を見る」（相応部經典（犍度篇）「長老品・跋迦梨」）という言葉がある。法を体得すれば釈尊に会うことができ、釈尊に会えば法を悟れるという意味です。

「我を見る」の「我」とは、根本的には「永遠の法」と一体となった「永遠の仏」です。寿量品では、永遠なる「常住此説法（常に此に住して法を説く）」（法華經四八九ページ）の仏身を説く。文上の法華經では、五百塵点劫以来の「久遠実成の釈尊」のことだが、その指向しているのは無始無終の「久遠元初の仏」です。釈尊が悟った「永遠の法」即「永遠の仏」は、あらゆる仏が悟った「永遠の大生命」であった。過去・現在・未来のあらゆる仏はことごとく釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟ったのです。

それが久遠元初の自受用身であり、南無妙法蓮華經如来です。

戸田先生は言われた。「日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのです。これを久遠元初といえます。始めもなければ、終わりもないのです。大宇宙それ自体が、大生命体なのです」と。無始無終で慈悲の活動を続ける、その大生命体を「師」として、「人間・釈尊」は人間のまま仏となったのです。そして、悟ったとたん、三世十方の諸仏は皆、この人法一箇の「永遠の仏」を師として仏になったのだとわかったのです。—と。

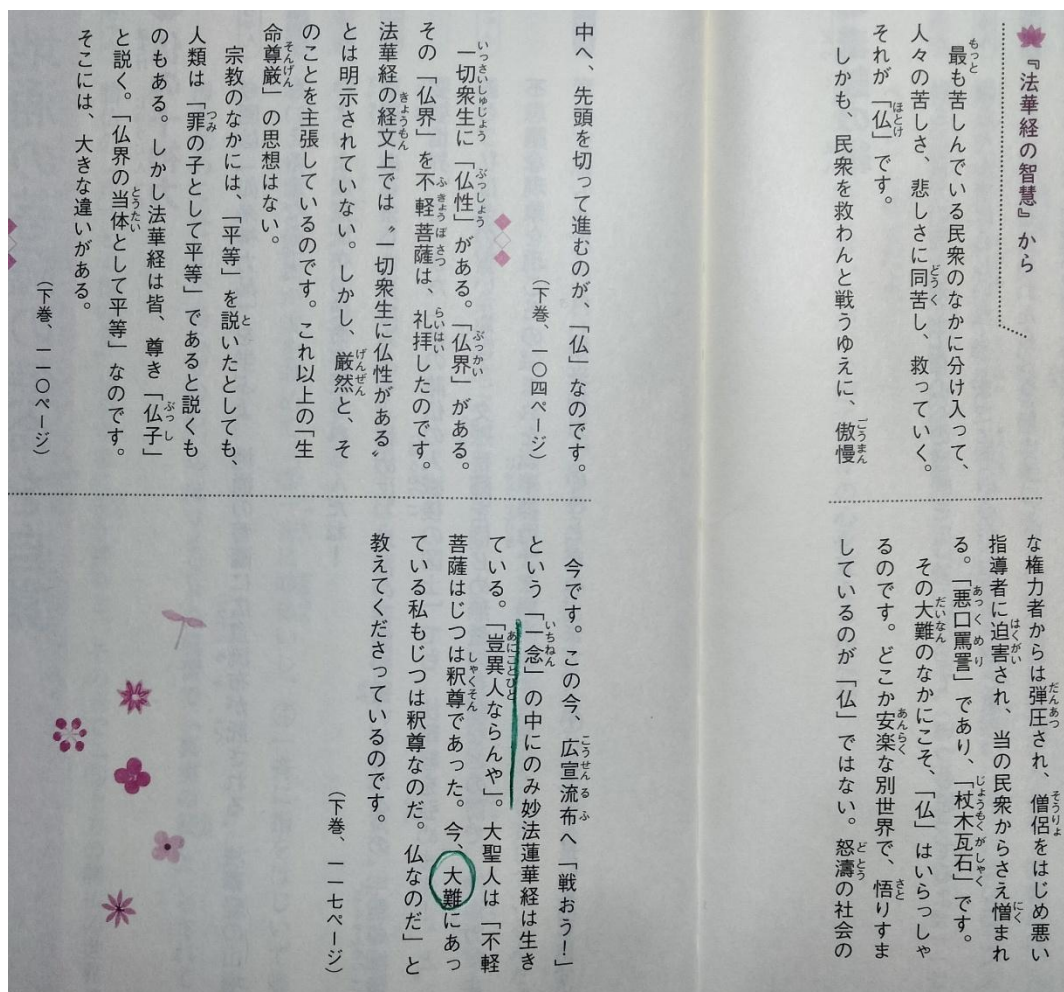
また、「原本」中 283、284 頁、如来寿量品には—
釈尊の真意は「一念三千を見よ！」

遠藤 はい。先ほど、寿量品の「発迹顕本」の意義について、うかがいました。釈尊は、「永遠の法」即「永遠の仏」を師として仏になった。釈尊が師としたのと同じ永遠の法即仏を師とせよ、と弟子たちに説き明かしたのが発迹顕本である。そこには、“「人間・釈尊」に帰れ！そして釈尊を仏にした根源に直達せよ！”との力強いメッセージが込められていた。—こうしたお話に、目の覚める思いがしました。齊藤 この「永遠の法」とは南無妙法蓮華經であり、「永遠の仏」とは南無妙法蓮華經如来すなわち久遠元初の自受用身のことですね。

池田 そうです。南無妙法蓮華經は法であるが、同時に仏身なのです。人法一箇です。ここが大事なところです。「法」といっても「人（仏）」を離れた法は、「理」だけの存在です—と。

（私見）上記こそが、池田先生の法華經を文底から読まれた結論なのです。それを全く無視しているのが「入門」であり、「法華經の智慧」を語る資格はないのです！

続いて「入門」180、181頁、**常不輕菩薩品第二十**には以下の記述です。



上記に対して、「**原本**」下116、117頁には以下記述です。—

「在世は今にあり、今は在世なり」

齊藤 一方、不輕菩薩は、その後も、生まれるたびに諸仏に仕え、法華經の広宣流布へ「心畏るる所無く」戦い続けます。そして仏になります。

池田 そこまで語って、突然、釈尊は「この不輕菩薩とは、だれのことか？ほかならぬ私のことなのだ」と宣言するのです。じつに、ドラマチックだ。

須田 遠い昔話と思っていたのが、一転、目の前の現実の話に変わる。皆、どきっとしたでしょうね。

池田 そこです。日蓮大聖人は、この「豈異人ならんや、則ち我が身是れなり（どうして別人であろうか。否、私のことなのだ）」の經文を、さらに深く我が身で読まれたのです。大難を呼び起し、竜の口で命まさに尽きなんとするとき、発迹顯本され、生きのび命をのぼされた。そして佐渡に向かう途中の寺泊で、こう仰せです。

「法華経は三世の説法の儀式なり、過去の不軽品は今の勸持品今の勸持品は過去の不軽品なり、今の勸持品は未来は不軽品為る可し」

遠藤 “今、勸持品に説かれる三類の強敵を呼び起こしたのは、私である” と。それは過去に不軽菩薩が戦った戦いを、今、この身でしているのであり、未来から見るならば、今の私の戦いは不軽菩薩と同じとわかるであろう——と。齊藤 「三世の説法の儀式なり」。甚深ですね。

池田 「在世は今にあり今は在世なり」です。ぼやっとして、「法華経」を、紙に書いた二十八品のことと思ってはならない。仏法は「今」「この」、凡夫の「現実」のなかにしかないのです。この「今」の奥底を「久遠」といい、この奥底を開くことを成仏という。それを教えたのが法華経なのです。今です。この今、広宣流布へ「戦おう！」という「一念」のなかにのみ妙法蓮華経は生きている。「豈異人ならんや」。大聖人は「不軽菩薩はじつは釈尊であった。今、大難にあっている私もじつは釈尊なのだ。仏なのだ」と教えてくださっているのです。それがわからないと法華経を学んだことにならないよ、と。

須田 法華経というのは、本（書物）のことではない——。

池田 戸田先生にある人が質問して「中国・インドに仏法がもはやないとされているが、経典はたくさん残っているではないか」と。先生は「経典があるだけで、正しい信仰がなければ、仏法はない。経典は、それだけでは、ただの本（書物）だ。仏法じゃないのです」と言われていた。——と。

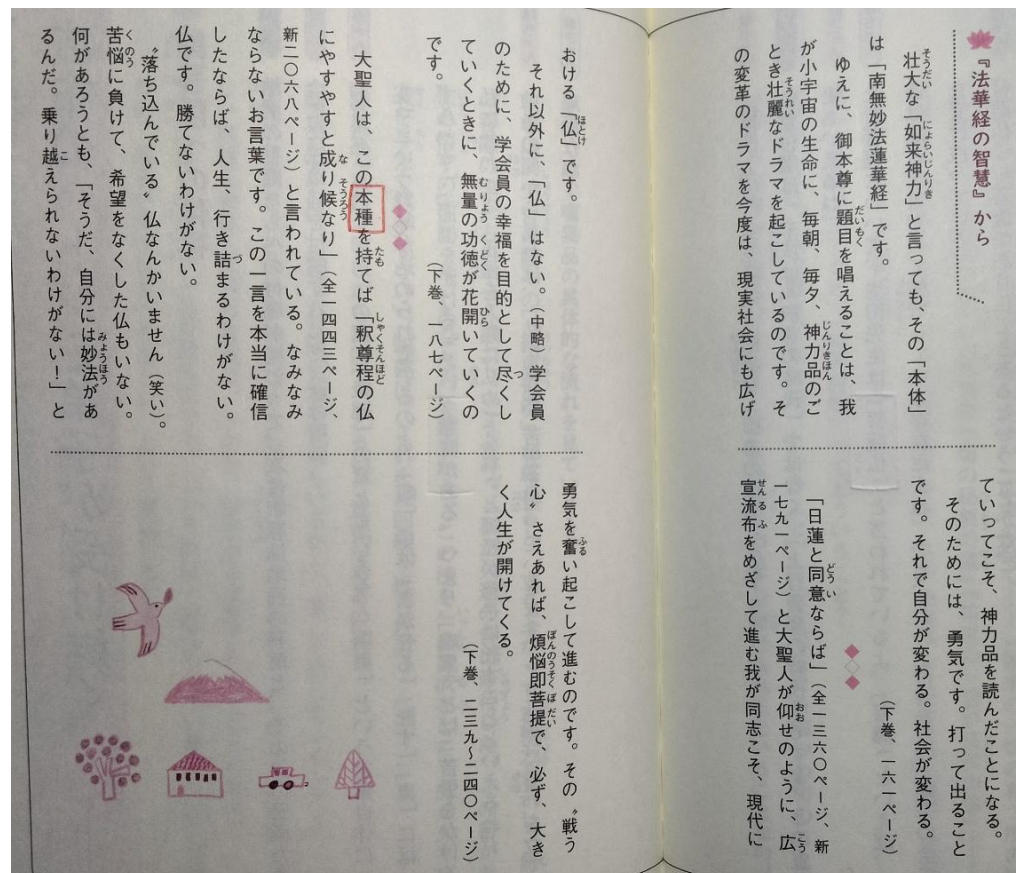
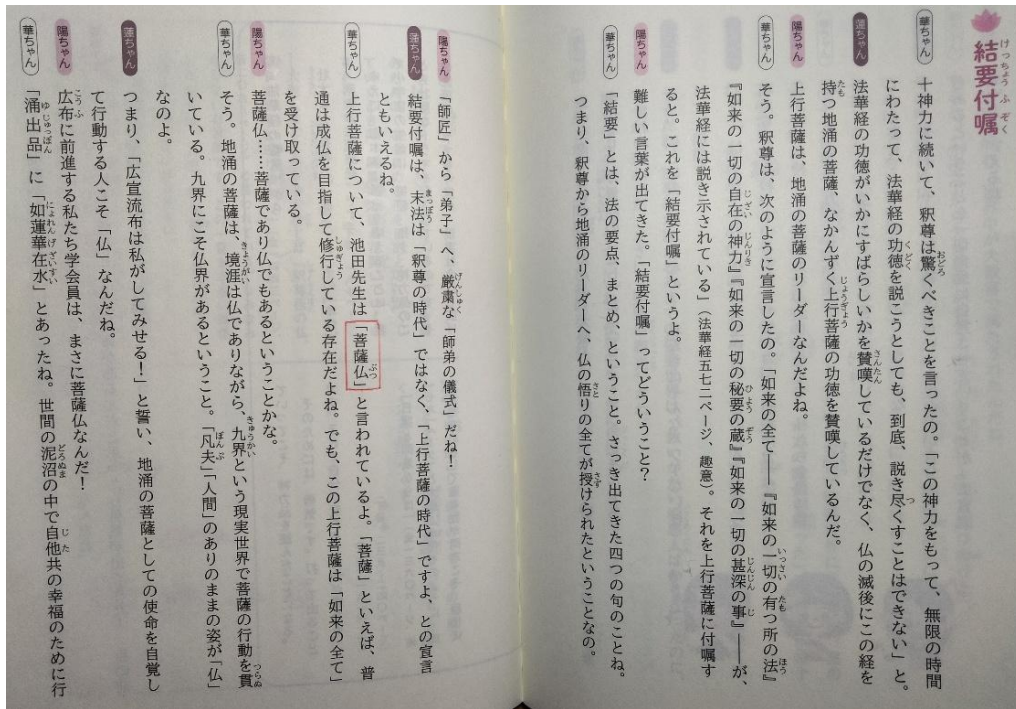
（私見）「入門」で引用された「法華経の智慧」下117頁、常不軽菩薩品の記述—「豈異人ならんや」と、大難 一の、その前には、竜の口の法難(大難)と

日蓮大聖人の発迹顕本が記されているのです。そして、その後には、

池田先生のご指導—「法華経」を、紙に書いた二十八品のことと思ってはならない。仏法は「今」「この」、凡夫の「現実」のなかにしかないのです。この「今」の奥底を「久遠」といい、この奥底を開くことを成仏という。それを教えたのが法華経なのです。——とあるのです。

私は、このご指導は、法華経は日蓮大聖人のために説かれたとの意義を再度ご教示されたのだと拝します。ゆえに、この「入門」の引用は、御書のご文と大難の真意を示さない、片手落ち、否、引用の価値を成さないと断言します。特に、—大難にあっている私もじつは釈尊なのだ。仏なのだ—だけを引用して終わることは、「入門」が、結果的に、池田先生のご指導の本意、すなわち、法華経の文底から日蓮大聖人を宣揚されておられることが伝わらないことになるのです！

続いて、「入門」186～189頁、如来神力品第二十一には以下の記述です。



上記に対して、「**原本**」中283頁、**如来寿量品**には*—
釈尊の真意は「一念三千を見よ！」(***如来神力品**からだけでなく、他の引用です。)
遠藤 はい。先ほど、寿量品の「発迹顕本」の意義について、うかがいました。釈尊は、
「永遠の法」即「永遠の仏」を師として仏になった。釈尊が師としたのと同じ永遠の法即
仏を師とせよ、と弟子たちに説き明かしたのが発迹顕本である。そこには、“「人間・釈
尊」に帰れ！そして釈尊を仏にした根源に直達せよ！”との力強いメッセージが込めら
れていた。—こうしたお話に、目の覚める思いがしました。齊藤 この「永遠の法」とは
南無妙法蓮華経であり、「永遠の仏」とは南無妙法蓮華経如来すなわち久遠元初の自受用
身のことですね。

池田 そうです。南無妙法蓮華経は法であるが同時に仏身なのです。人法一箇
です。ここが大事なところ。」「法」といっても「人（仏）」を離れた法は、
「理」だけの存在です。実際には——「事」の上では——仏の智慧を離れた法
というのはいないのです。久遠元初の仏——無始無終の常住の仏は、宇宙生命そ
のものであり、一瞬の停滞もなく、常に不断に、一切衆生を救おうと活動して
おられる。その仏と自分自身が、じつは一体であり、自分自身が久遠の昔から
人々を救うため、広宣流布のために働いてきたのだ、今だけのことではないの
だ——そう自覚するのが寿量品の心です。

齊藤 信仰が、人生が「根なし草」になってはならないということですね。それは「師
弟」ということを忘れるなということだと思います。寿量品の真髓も、ここにあります。
釈尊自身の「師」である「因果俱時不思議の法」即「久遠元初の仏」を示さんとするの
が寿量品の肝心ですから。ただ、経文には、その「一法」は示されていません。あくまで
釈尊の本地は、五百塵点劫というはるかな昔からの仏であるということとどまっています。

池田 だから「本果妙」なのです。久成の釈尊が、根源の一法を修行して、ど
うなったかという「結果」を説いたのが、文上の寿量品です。しかし、どうや
って、その結果を得たのかという「本因」は明かされていない。言いかえれ
ば、文上の法華経には「本尊」がないということです。絢爛たる説法が相次い
で行われるのに、一体、結論として、法華経は何を本尊とせよと言っているの
か、わからない。これが古来、多くの議論を呼び起こしてきたのです。ある意
味で、本尊が説かれていないのは当然で、在世の衆生は、法華経に来て、皆、
成仏してしまうわけです。その人には、もう本尊は何かわかっているわけ
です。しかし、滅後の衆生なかんずく末法の衆生は、そうではない—と。

さらに、「**原本**」下233～236頁、**如来神力品**には—
「**文底**」が説かれて仏法は完結

齊藤 前項で仏教の歴史を「仏因の探求」という観点から語っていただきましたが、その
探求の究極が「寿量品の文底」にあるという結論になります。

ここまで至らないと、「生きとし生けるものを仏にしたい」という釈尊の願いも完結しません。

池田 寿量文底の「仏因」とは、言うまでもなく無始無終の妙法であり、南無妙法蓮華経です。これは「仏因」であると同時に「仏果」です。「因果俱時・不思議の一法」です。これを寿量品の説法を聞いて覚知したのです。寿量品を、虚空会上の”三十二相の、きらびやかな釈尊の話”と思ったら間違いです。その色相莊嚴の仏を見上げているだけなら、所詮は”他人ごと”になってしまう。そうではなく、五百塵点劫の説法で、どんどん過去にさかのぼっていったあげく、自分の究極の”原点”は、釈尊の”原点”と同じであったと分かったのです。”虚空”を見上げていて、はっと”足もと”に気づいたのです。これが「等覺一転名字妙覺」です。(成仏の本因が南無妙法蓮華経如来であることを述べた文。等覺という最高位の菩薩でも、久遠元初の妙法を覚知して、「等覺」から一転して「名字即」という凡夫の位になり、そこから直ちに仏の位である「妙覺」になること)

須田 一段一段、成仏を目指して階段を上った果てに、じつは「出発点」に戻った。自分を生み支えている宇宙生命そのものを自覚したということになります。遠藤「具騰本種」というのも同じ意味ですね。「具つぶさに本種を騰ぐ」と読む。妙楽大師の言葉。成仏の根本原因＝本種は寿量品の文底に蔵されており、この本種を覚知したがゆえに法華経の会座の衆生も成仏したとする) **斉藤** その「本種」が「南無妙法蓮華経」である。それを自覚した。

池田 文上を聞いただけで文底がわかった。そういう機根の衆生は、それでいい。しかし、わからない機根の衆生は、どうするのか。これが「滅後の弘教を上行菩薩に託した」理由です。上行菩薩という「菩薩仏」——すなわち「因果俱時・不思議の一法」を、その身に体現している人が、「因果俱時・不思議の一法」を弘めるのです。仏法では必ず「説かれる法」と「説く人」が一致しているのです。

斉藤 「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」ともあります。中国・唐時代の天台僧・道暹の『法華文句輔正記』の言葉。大聖人も観心本尊抄〈御書二五〇ページ〉などで引用されている)

池田 日蓮大聖人は「本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり」と仰せです。末法の機根の衆生には、まっすぐにそのまま、成仏の「本因」を久遠元初の妙法を説くのです。そのための如来神力品の付嘱です。一と。

(私見) 上記「入門」には、本種と菩薩仏の名前だけ引用で、その本義が記されていない！これでは、「法華経の智慧」の引用は偏頗、不十分である。池田先生のご指導に違背した論述と言わざるを得ない！

上記「**法華經の文底**」について、親友中村誠氏より以下寄稿を頂きました。

—「**「文底」が説かれて仏法は完結**」と池田先生が述べられた箇所は極めて重要なのですが、調べてみると、この本は「**文底**」という言葉は三か所しか登場しません。しかもこれだけだと意味不明になります。これらがそうです。

方便品の冒頭での仏智の讃嘆は、**文底**から言えば、南無妙法蓮華經の讃嘆にほかならない。そこに、私たちがこの部分を読誦する最大の理由があります。（Kindle版29p、書籍28p）

文底から見るならば、妙音菩薩も、苦しみと戦い、戦い、また戦って、題目を唱え、人間革命したのです。（Kindle版192p、書籍212p）

その上で池田先生は、「**文底**から見るならば『観音の名を称える』とは、観音の力の根源である久遠の本仏『南無妙法蓮華經如来』の名前を唱えるということ」（下巻、三六一ページ）と言われているよ。（Kindle版195p、書籍215p）

これだけだと当然**文底**とは何を意味しているかが不明になります。これだけみても、この本が如何に酷いかが判明します。事実上、**文底**を否定していて、文上の釈迦仏法しかといていません。ですから、法華經の主人公を釈迦にしてしまっていますね。次の戸田先生の教えを完全に無視している。—

「寿量品において「譬如良医」とは、**久遠元初の自受用身、無作三身の如来、また、南無妙法蓮華經仏**とも申しあげる（中略）譬如良医をインドの釈迦と読んではならぬ」（戸田城聖全集一卷、寿量品、p. 94）

当然池田先生はこの教え法華經の智慧の講義でも守ってきました。

「“良医と病気の子どもたち”の譬え

名誉会長： この「方便現涅槃」の意義は、良医病子の譬えを見れば、もっとはっきりするでしょう。

遠藤： はい。譬えのあらましを言いますと、良医が旅に出ている間に、その子どもたちが毒薬を飲んでしまった。苦しんでいるところに、父の名医が帰ってきた。父は「大良薬」をつくって与えました。

須田： この名医は仏、子どもたちは衆生。大良薬は法華經であり、釈尊の師でもある「**永遠の妙法**」に当たります。**末法**で**いえば御本尊**です。

遠藤： そうなります。ところが、せつかく最高の薬が与えられたのに、毒気が深く入りすぎて、薬を飲もうとしない子どもたちがいた。飲んだ子どもは、たちまち元気になりましたが、飲まない子はどうしようもありません。苦しみ、のたうち回っています。

名誉会長： そういう子どもを「顛倒の衆生」という。病んで、治療を願っていないながら、薬は飲みたくないというのだから「顛倒」です。道理がわからないくらい「毒気深く入り」になっている。大良薬も「おいしくない」と思って拒否している。

寿量品では「本心を失っている」と言っています。わけがわからなくなっている。「頭破作七分（頭破れて七分に作る）」の姿と言っていていいでしょう」

(**法華經の智慧** 4巻, p. 376-377、普及版中 p.5 2 0)

会話の文脈から、**良医 = 日蓮大聖人**となっているのは明白ですが、これを「法華經入門」では、**良医 = 釈尊**としています。それが次です。

—「そう、**釈尊の生命は永遠不滅**。だけど、釈尊はあえて入滅（死）するの。その意味を示しているのが、寿量品の「**良医病子の譬え**」ね。—

(Kindle 版. 1 1 8 p、書籍 1 2 8 p)

中学生レベルの要約としても完全に失敗しています。悪質かつ劣悪で、ここまで酷い学会の本を私は見たことがないです。—と、中村氏の論究です。

(**私見**) 中村氏の指摘は、全くの正論です。

以上で「入門」と「**原本**」の主要部を比較しました。

最後に、もう一つ、「入門」の**如来寿量品第十六**に欠落している法華經の最重要義「**本因妙**」についての池田先生の「**原本**」ご指導を引用致します—

「原本」中 307～308 頁には「因果一念の宗」の宇宙大のスケール

池田 譬えて言えば、文上の「久成の釈尊」は、たわわに実った果物のような姿です。その果実の姿はすばらしいが、それをもたらした種子は経文の表には見えない。隠されているわけです。果実の中の種子を示すのが文底の仏法です。この点は、今後もさまざまな角度から論じることになると思うが、先ほどの「因果」論から言えば、大聖人は、御自身の本因妙の仏法を「因果一念の宗」と仰せです。

須田 「因果異性の宗」（方便権教）、「因果同性の宗」（法華経迹門）、「因果並常の宗」（法華経本門）に対する「因果一念の宗」ですね。

池田 問題は「並常の宗」と「一念の宗」の違いです。文上の本門では、釈尊の一身に仏界（果）と九界（因）がともに永遠に具わっている（並常）と言っているだけで、そうならしめた「本因」は説かれていない。その本因とは「因果俱時不思議の一法」です。釈尊が師とした、この本因を、直ちに、そのまま説くのが「本因妙の教主」です。日蓮大聖人は、「其の教主は某なり」と宣言されています。

遠藤 「百六箇抄」の「我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり」のところですね。

池田 この「本因妙の妙法」こそ、法華経の寿量品の文の底に秘し沈められた「三世諸仏の本尊」であり「真の一念三千」なのです。この「一法」こそ、「本因」であり同時に「本果」でもある。「仏因」と「仏果」が同時ですと。

（私見）上記ご指導に記された「因果一念の宗」（全 871、新 2220 頁）は御書の

「本因妙抄」なのです。これから拝察し、池田先生は「法華経の智慧」を

日蓮大聖人のご相伝である「本因妙抄」と「百六箇抄」、そして、

「原本」全編で引用の「御義口伝」を用いて、文底の法華経、即

ち、日蓮大聖人の南無妙法蓮華経、即ち、人法一箇の御本尊をご教

示されているのです。 「入門」には「本因妙」と「本果妙」の区別がな

いのです！

この30年間、私たち世界の同志は、池田先生が日蓮仏法の真髓を**大聖人の**

ご相伝書の真義からご指導された「法華経の智慧」により歓喜、感動の信心の歩みを続けられたのです!

それに対し、今回発刊の「法華経入門」の稚拙さと不整合さに、私は落胆しかありません。私は30年間、「**法華経の智慧**」を拝読して来ました。世界中の同志も同じと拝察します。池田先生の本当の法華経論を心肝に染めて来ました。ゆえに、今回の「法華経入門」に対しては、失望しかありません。

結論、「法華経入門」の底意は釈迦本仏論であり、それは、「教学要綱」の底意と同じなのです。「法華経入門」は、命懸けで信心をする学会員さんを見下していると思えません!

あらためて、本日、日蓮大聖人のご生誕日、**大聖人様と池田先生**はこれほど酷い「法華経入門」に対し、どれほど嘆かれているか、私は心痛の極みです。

あとがき

5日前、2月11日、**戸田先生のご生誕日**にYouTube <https://share.google/oifwYeB9yK8UtwoRg> を視聴しました。内容は昭和33年に発刊の戸田城聖先生の『法華経方便品・寿量品講義』の朗読です。私事です。40年以上前、まだ「**法華経の智慧**」が発刊される前、神田の古本屋で見つけ宝物として拝読しました。池田先生が戸田先生から拝受された法華経講義がこの書と確信し、まさに、眼光紙背に徹して昼夜読みました。

この戸田先生の法華経講義こそが創価学会の折伏75万世帯への原動力でありました。私の母は戸田先生の方便品・寿量品講義を直接聴講し折伏に走りました。私も母の背中で戸田先生のお声を耳朶にしました。その戸田先生の生命からの獅子吼とも拝せる『**法華経方便品・寿量品講義**』を、なんと朗読で聞けますこと、これほどの喜びはありません。池田先生の恩師戸田先生の講義も学び、**法華経文底の日蓮大聖人の仏法**をさらに深く研鑽したく決意しています。ユーチューブには以下のあいさつがありました。ご紹介させていただきます。—

皆様、大変お久しぶりです。本日、二月十一日、恩師・戸田城聖先生の御生誕記念日という佳節に合わせ、当チャンネルを再始動させていただくこととなりました。以前、私は池田名誉会長の『法華経方便品・寿量品講義』の朗読を配信しておりましたが、著作権上の配慮により、已む無く、全ての動画を削除いたしました。

これまで御視聴して下さった皆様には、多大なるご心配とご迷惑をおかけしましたことを、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。活動休止の間、皆様からいただいた温かい励ましの声を支えに、「再び、正しき仏法の哲学を研鑽する場を作りたい」と切に願ってまいりました。

そこで本日より、心機一転、戸田城聖先生の『法華経方便品・寿量品講義』を拝読してまいります。戸田先生の峻厳な師子吼、ユーモア溢れる慈愛の言葉、そして日蓮大聖人の甚深の法理を、皆様と共に学び、自身の生命を磨く糧としていく決意です。

一言一句、恩師の魂を汲み取る思いで真剣に拝読してまいります。新しく出発する当チャンネルを、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。又、以前法華経の智慧で池田先生と座談されていた須田晴夫氏のホームページより（御本人の許諾を得て）引用の法華経の智慧について 講演要旨や、宮田論文への疑問 日蓮本仏論についての一考察の朗読も交互に配信して参ります。

イキイキ仏法広場「朗読」高橋純子一と。

（私見）戸田城聖先生の『法華経方便品・寿量品講義』の朗読を、日蓮大聖人様と、牧口・戸田・池田の三代会長がどれほどお喜びか、私は感動でございます。

この拙文を親しき友人にもお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご高見、ご指導を kiiroibara.526@gmail.com に、お願い申し上げます。

敬具 凶斉修